

第二次世界大戦とディズニー

～ディズニープロパガンダアニメーションをめぐる～

外国語学部 国際文化交流学科 4年

山野辺 楓

1. はじめに

第二次世界大戦中、多くの国で戦争のためのプロパガンダアニメーションが制作されていた。1940年前後の枢軸国のアニメーションといえば、ドイツでは反ユダヤ教のカラーアニメーション『別の葉を見ていた小木』¹がある。ドイツでは、カラーであったが日本とイタリアでは、まだ白黒であった。日本では1944年には『桃太郎の海わし』が、イタリアでは1942年に『チャーキル博士』が公開された。²一方、アメリカも同じような状況であった。今日では、「夢と魔法」などファンタジーなイメージの強いディズニーであるが、ディズニー・スタジオは、多くの戦争プロパガンダアニメーションを制作していた。ディズニー以外にもプロパガンダ作品を制作していたが、ディズニーでは特にその数が多かった。本論文では、ディズニーのプロパガンダ作品に焦点を当て、その内容と表現方法を紹介し、どのようなメッセージを観客に与えたのか考察する。後半では、ディズニーのキャラクターに焦点を当て、プロパガンダ作品の中での位置付けを考察する。

2. プロパガンダ作品の制作

長編アニメーションの成功によって繁栄していたディズニー・スタジオにも第二次世界大戦の勃発により、1939年頃から影響が出てくるようになった。スタジオの収入の45パーセントは海外からのものであったが、戦争の影響によりドイツ、イタリア、オーストリア、ポーランド、チェコスロバキアなどの重要な市場は閉鎖され、イギリスやフランスからの送金も凍結されてしまった。³ それと同時に、アメリカ国内の映画市場にも変化

が見られるようになった。ヨーロッパが戦争に入ると、アメリカの若者は徴兵されるようになり、アメリカ国民のディズニーのおとぎ話に対する関心は薄れていった。

1941年12月7日の日本軍による真珠湾攻撃を受け、500人のアメリカ陸軍兵士がプエナビスタにあったカリフォルニアのディズニー・スタジオに乗り込んだ。軍用車の修理と対空戦用兵器の管理のために軍が録音用スタジオを占拠し、カリフォルニアを守るという名目で300万発の弾丸の薬莖が駐車場に置かれることになった。⁴ ディズニー・スタジオはハリウッドで占拠を経験した唯一のスタジオであり、ロッキード社の航空機製造工場を敵の攻撃から守るための占拠であるとされているが、真の理由はいまだに明らかにされていない。⁵ 陸軍は、ウォルトやロイをはじめとしたディズニーの従業員全員の指紋を取り、身分証明のためのバッジを身につけるよう命じた。各ゲートには、常に憲兵が立つことになった。制作途中の劇場向け作品は、ほぼ休止状態になり、スタジオは事実上の軍需工場となった。ウォルト・ディズニーの兄であるロイ・ディズニー(Roy Oliver Disney, 1893-1971)は、当時の状況を次のように語った。⁶

40年代には戦争があり、市場が凍結した。当社にとって厳しい10年間で、切羽詰まった状況に追い込まれた。社員はみな若かったため、徴兵を受ける可能性があった。何人も社員を失った。社員を奪われないよう、ウォルトは軍のための映画製作を始めた。この大義名分で、スタッフをある程度会社に残し、事業を続けるための核の部分を持ってきた。

アニメーションを制作し続けるために、ウォル

トは今までとは違うディズニーアニメーションを手掛けなければならなかった。当時、ウォルトは、長編アニメーションの制作に情熱を注いでいたが、スタジオの状況を考えるとアメリカ政府からの依頼である教育的なアニメーションを制作する他なかったのだと考えられる。

3. 納税促進ためのディズニー作品

ウォルトは、1941年に当時の財務長官であるヘンリー・モーゲンソー(Henry Morgenthau, Jr. 1891-1967, 在任期間1934-1945)から依頼を受け、政府の金の使い道を説明し、アメリカ国民に納税を促すことを目的とした短編映画製作の仕事を引き受けた。アメリカ合衆国財務省の支援で『新しい精神(The New Spirit)』を制作し、1942年に公開した。あらすじは、ラジオを聴いていたドナルドは、アメリカ沿岸が攻撃を受けたことを知るが、ラジオは市民の務めとして税金を払わなければならないと教える。アメリカの役に立とうとドナルドは、用紙に必要事項を書き込み、カリフォルニアからワシントンまで直接納税しに行く。ドナルドが納めた税金はやがてアメリカの軍事費になり枢軸国の戦艦を破壊していくという内容である。⁷本作は、3200万人以上が鑑賞し、37%が税金を払うと答え、87%の観客がほかにも政府の広報映画を作るべきとした。⁸

この結果を受け、翌年には『43年の精神(The Spirit of '43)』を公開した。給料をもらったドナルドに、年寄りの節約家のアヒルが節約と納税を勧める。それに対して若い浪費家のアヒルはドナルドを酒場に誘う。誘いに乗ろうとしたドナルドだったが、よく見ると若いアヒルはヒトラーのような髪とヒゲを生やしていた。自分の使命に気づいたドナルドは若いアヒルを殴り飛ばし、年寄りのアヒルと共に税金を払いに行くという内容である。⁹前作である『新しい精神』と同様にドナルドが主役の短編作品で、無駄遣いすることは枢軸国に金をやるのと同じことであるというメッセージが含まれている。前作と共通して、後半のパートでは税金が軍事費に変わり、敵の戦艦を破壊するシーンが用いられている。

『新しい精神』では、前半部分でラジオの音声は、ドナルドにはっきりと”Your country is at war. Your country needs taxes of guns, taxes of ships, taxes of democracy, taxes to beat axis.”と言うシーンがある。¹⁰ディズニー作品がセリフの中で戦争を意識させる作品は珍しい。

『新しい精神』と『43年の精神』は、非プロパガンダ短編と同じく前半では、コミカルな要素が含まれているが、後半では一転し、赤い背景や重く不気味な印象の音楽を使い、また、戦艦がリアルに表現されていることによって、観客にショックを与え、印象づけたのではないだろうか(図1、2)。この2作の重く暗い表現とは異なる方法で、観客にショックを与えたプロパガンダ作品も存在する。



【図1】(5:51)
(キャプチャーと秒数のカウントは全て筆者による)



【図2】(7:21)

4. ナチスドイツを批判した作品

1943年には、ナチスドイツを批判したプロパガンダ要素の強い4作品が作られた。まず一つ目に



【図3】(1:57)



【図4】(2:27)

『総統の顔 (Der Fuehrer's Face)』がある。本作は、ドナルドダックが主役の短編アニメーションであるが、当時のナチスドイツを風刺した内容が含まれており、1943年に行われた第15回アカデミー賞のアカデミー短編アニメ賞を受賞した。¹¹ 物語は、ドイツの簡素な家に住むドナルドが眠っているところから始まる。朝から軍人たちが行進しながら楽器を演奏し、軍歌を歌っていた。その軍人たちに無理やり起こされたドナルドは、ヒトラー、昭和天皇、ムッソリーニの肖像画に「ハイル・ヒトラー」とナチス式の敬礼をする (図3)。その後、パジャマから軍服に着替え、金庫に隠し持っていたコーヒー、ベーコンの香り、のこぎりで切らなければいけないほど固いパンで朝食をとる (図4)。軍人から『わが闘争』を読まされたドナルドは、爆薬工場へ向かう。砲弾をライン生産し一つ一つ組み立てていたドナルドだが、途中でヒトラーの肖像画も一緒に流れてきたため、すべての肖像画に敬礼する。あまりにもたくさんの砲弾が流れてきてパニックになったドナルドは、砲弾が飛び交う世界に迷い込んでしまう。しかしそれは夢で

あり、星条旗のパジャマを着たドナルドは自由の女神のミニチュアにキスをし、アメリカ国民であることを喜んだ。最後にヒトラーの顔にトマトがぶつかり“THE END”の文字が浮かび上がったところで物語は終わる。¹²

金庫に隠し持っていたコーヒー (正確には水にコーヒー豆一粒をつけただけのもの) というのは、戦時中に嗜好品が禁止されていたことを示す。また、固いパンやベーコンの香りは、ナチスドイツがいかに苦しい状況であるかということを示唆したものである。大げさな表現ではあるが、敵国であるナチスドイツを風刺したものであると考えられる。本作品は、ドナルドのみじめな生活に焦点を当て、ドナルドは見事にみじめな役を演じている。

本作品は、印象的な挿入歌でも有名になった。ディズニー・スタジオで音楽制作を担当していたオリバー・ウォーレス (Oliver Wallace 1887-1963) のダイナミックな歌と、ドナルドのほとんどシュールとさえいえる虚脱感により、この映画は傑作になっている。¹³ 挿入歌である「総統の顔」の歌詞は以下の通りだ。

Ven der Fuehrer says, “Ve iss der Master race?” ,

Ve Heil! Ve Heil! Right in der Fuehrer's Face!

Not to luff der Fuehrer iss a great disgrace

So ve heil! Heil! Right in der Fuehrer's Face

総統閣下が「我々は支配民族である」と仰るとき
我らは総統閣下のお顔をまっすぐに見つめて言う!
ハイル!ハイル!と

総統閣下を愛さぬなど面汚しもいいところ
だからハイル!ハイル! 総統閣下のお顔を
まっすぐに見つめて¹⁴

ドナルドがやけくそになってつぶやく「ハイル! (Aw heil!)」は「くそっ! (Aw hell!)」のたくみな言葉遊びでもある。¹⁵ この映画のタイトルは、当初『ナチランドのドナルド (Donald in Nutziland)』になる予定であったが、目立った登場

をする挿入歌のタイトルに上映前に変えられた。

リアルな表現を用いた『新しい精神』とは異なり、本作品は最初から最後までドナルドのドタバタ劇である。それまでのドナルドダックシリーズの短編と同様にドナルドが災難に遭い、激怒し疲弊する典型的なドナルドの短編作という印象を受けた。しかし、ドナルドを激怒、疲弊させる存在は誰が見ても分かるようになっており、最後にはアメリカ国民で良かったと思わせる表現が用いられている。ディズニーの作品がここまではっきりと他国を意識し描いていることが当時の人々に衝撃を与えたことによって、アカデミー賞を受賞したのではないかと考えられる。

二つ目には、ドイツの青少年教育の影響力を告発したグレゴール・ズィーマー (Gregor Athalwin Ziemer 1899-1982) の『死への教育—ナチスはいかにして作られるか (Education for Death: Making of the Nazi)』というベストセラー本から着想を得た¹⁶『死への教育 (Education for Death)』が作られた。

この作品には、ディズニーの有名キャラクターは登場しないが、ハンスという少年が登場する。彼が生まれてから、ナチスドイツの学校に通い、教育を受け、後に軍人として戦死するまでを描いた作品である。¹⁷

この作品では、主人公の人生を追い、最後には軍人として行進し、やがて墓標になってしまう部分が非常に印象深い(図5)。さらに、そのシーンでは、“Now, education is complete. It's education for death.”というナレーションが流れる。ナチスドイツの軍事的な教育を「死への教育」と表現し、視覚的に分



【図5】 (9:57)

かりやすく表現し批判していると捉えることができる。

三つ目には、理性と感情を人格化したキャラクターが登場する『理性と感情 (Reason and Emotion)』、四つ目には、キツネのフォクシー・ロクシーが食事のために効果的な嘘を利用する『チキン・リトル (Chicken little)』が作られた。この二つの作品では、それぞれのオリジナルキャラクターたちが登場し、宣伝家たちの嘘に踊らされてはならないというメッセージが込められている。さらに、その嘘やデマに抗する術を教えるための作品である。¹⁸

5. ミッキーとドナルド

1941年から1945年にかけて、ディズニーは77本のプロパガンダ映画を制作しているが、¹⁹ドナルドが多くのプロパガンダ作品に登場しているのに対して、ミッキーはほとんど出演していない。ディズニーの看板キャラクターであるミッキーは、なぜプロパガンダアニメーションに使われなかったのだろうか。ミッキーとドナルドの性格をふまえて検討したい。

ディズニーの看板キャラクターであるミッキーは、徐々にその性格が変わっていることがうかがえる。1928年の『蒸気船ウィリー (Steamboat Willie)』や1929年の『プレーン・クレイジー (Plane Crazy)』などのスクリーンデビュー当時のミッキーは、攻撃的で好色な面が目立つ。登場する他のキャラクターや動物へのいたづらや乱暴をするシーンがあり、粗野でサディスティックな印象が強い。1930年代初めのインタビューでウォルトは、ミッキーの人気について「ミッキーが大きいものに勝利すると、観客は喜ぶ」、「ミッキーがシンプルで単純であり、理解しやすいことから、みんな好きにならずにはいられない」と説明した。²⁰

しかし、ミッキーの人気が高まるにつれ、その粗野な性格は変えざるを得なくなった。スタジオのプレスリリースでウォルト (と思われる人物) は、「ミッキーはこんにち、大衆が理想化してボーイスカウトの一員のようにしてしまった。彼にいたづらをさせ、かんしゃくをおこさせ、ジョーク

を言わせると、何千人もの人が非難の手紙を送りつけてくる。だからドナルド・ダックをつくるのは簡単だった。彼はわれわれのはけ口だ。ミッキーには使えないあらゆるアイデアを、ドナルドなら仕えるから」と語った。²¹ ミッキーはその人気ゆえに攻撃的で粗野な性格から優等生へと変化した。優等生になったミッキーとは対照的にドナルドは、36本のプロパガンダ作品に出演した。²² ドナルドは、1934年のスクリーンデビューから活躍し、ミッキーに代わる新しい主役であった。ニール・ゲイブラーは、ドナルドの活躍を次の様に指摘している。「不機嫌なドナルドダックは怒りっぽくうぬぼれが強く、尊大で自慢たらたら、粗野で疑り深く、独りよがりでわがままで、まさに不品行と攻撃性の象徴だった。ドナルドダックはある意味で観客にとって、日常からの解放、代償行為を意味したのかもしれない」²³ かつてのミッキーの性格は、ドナルドに受け継がれ、その喜怒哀楽の激しさがプロパガンダで発揮されることになった。

ウォルトがミッキーを自分の分身または相棒と捉えていたこと、²⁴ また、初期の頃とは異なるその優等生的なキャラクターから、ミッキーはプロパガンダ作品に出演しなかったのだと考えられる。そして、インタビューからも分かるように、初期のミッキーのキャラクターを彷彿させる攻撃的で喜怒哀楽の激しいドナルドが活躍したのだろう。このドナルドの性格は、もともとは、ミッキーが持っていたものである。それが時代と共に変化し、ドナルドに受け継がれたものだ。ミッキーがプロパガンダ作品に登場しなかったのは、ミッキーマウスとドナルドダックという二匹の人気キャラクターの明確な位置付けを示すためでもあったのではないか。優等生のミッキー、問題児のドナルドというような真逆のキャラクターとしてウォルトは表現したかったのだと筆者は考える。

6. その他のキャラクターとプロパガンダ

プロパガンダ作品の登場に関して対照的であったミッキーとドナルドであったが、その他にもプロパガンダ作品に出演していたキャラクターがいる。ドナルドの次に活躍していたのは、ミッキー

とドナルドの友人であるグーフィーだ。グーフィーは、13本のプロパガンダ作品に登場した。²⁵ 1943年には、グーフィーが同郷の人々に自動車に乗って燃料を消費するよりも体を動かして移動する方が良いと勧めた『グーフィーのすてきな乗り物 (Victory Vehicles)』という短編作品が公開された。この映画を見ると、戦時国債を買うという義務を思い起こさせるたくさんの広告が、すばやく流れていくことが分かる²⁶ 実際に動画を見ると”BEAT THE JAP WITH SCRAP”や”BUY DEFENSE BONDS”といった広告が流れていく



【図6】(6:31)



【図7】(8:11)

のを確認することができたが(図6、7)、²⁷ 日本語版では図6のシーンは削除されている。²⁸

1944年公開の『グーフィーの船乗り教室 (How to Be a Sailor)』は、グーフィーを通して船の歴史を説明した短編作品である。物語の終盤に海軍の一員であるグーフィーが魚雷発射の際に操作ミスをしてしまいミサイルのように吹き飛ばされ、日本の戦艦を破壊するシーンがある。その後、巨大な朝日を粉々に砕いてしまうといった描写があ

る。グーフィーのドタバタ劇はこれまでの定番であったが、直接的に日本を攻撃するシーンが描かれた作品は少ない。

グーフィーの短編は、観客の戦時意欲を掻き立てるといよりも、むしろそれを思い出させる目的が大きかったのではないだろうか。攻撃的なDonaldとは異なり、ドジなグーフィーのキャラクターを考えても、他国を批判、攻撃する作品には向かないキャラクターであったのだろう。『グーフィーの船乗り教室』では、直接的な表現があるものの、故意的な攻撃ではなく、いつものドジで結果的に攻撃となってしまったところを見ると攻撃的なDonaldのプロパガンダ作品とは異なる性質を持っていたと考えられる。

ミッキーの恋人であるミニーマウスと愛犬のプルートは、1942年の『一難去ってまた一難(Out of the Frying pan into the firing line)』というアメリカ合衆国農務省のために制作した短編作品に出演している。アメリカの主婦を演じたミニーがキッチンでラジオを聞いていると、残った油を保存すれば戦争のために有用なグリセリンができるという説明が流れてくる。²⁹

ミニーは、この作品以外のプロパガンダ作品にはほとんど登場していない。ミッキーの恋人であるミニーもまた、プロパガンダとはあまり縁のないキャラクターであった。これは、ミッキーが出演していない以上「ミッキーの永遠の恋人」であるミニーのみをプロパガンダ作品に出演させることは、ウォルトにとって好ましくなかったのではないか。

7. おわりに

ウォルトは、当時のスタジオの状況から、プロパガンダアニメーションの制作に踏み切った。その内容は、アメリカ国民へ納税を促すもの、ナチスドイツを批判し国民の戦意高揚を狙ったものがあつた。その中には、ユーモアやファンタジーの要素を含むものもあつたが、ディズニーのイメージとは大きくかけ離れた暗い印象のものや直接的な戦争の表現もあつた。

ディズニーのキャラクターたちは、彼らの性格

や役割からプロパガンダ作品において全く異なる位置付けにある。ウォルトは、それぞれのキャラクターにあつた方法で戦争を宣伝していたのだと考えられる。特に人気のあつたミッキーとDonaldは正反対の役割を持ち、看板キャラクターであるミッキーは、ウォルトの分身であり優等生的な性格から、プロパガンダ作品にほとんど出演しなかつたのだといふことができるだろう。

脚注

- 1 セバスチャン・ロファ (古永真一、中島万紀子、原正人訳) 『アニメとプロパガンダ 第二次世界大戦期の映画と政治』法政大学出版局、2011年80-81頁。
- 2 同上書、27、41頁。
- 3 ポブ・トマス (玉置悦子、能登路雅子訳) 『ウォルト・ディズニー』講談社、1995年、182頁。
- 4 前掲書、ロファ、285頁。
- 5 同上書、286頁。
- 6 ポブ・トマス (山岡洋一、田中志ほり訳) 『ディズニー伝説 天才と賢兄の企業創造物語』日経BP社、1998年、196頁。
- 7 YouTube “The New Spirit(1942)” (全体で7分21秒)
- 8 ニール・ゲイブラー (中谷和男訳) 『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』ダイヤモンド社、2007年、342頁。
- 9 YouTube “banned donald duck cartoon-the spirit of 43 (WWII)” (全体で4分58秒)
- 10 YouTube “The New Spirit(1942)” (2:15:2:26)
- 11 筈見有弘、渡辺祥子 『アカデミー賞記録辞典』キネマ旬報社、2013年、87頁。
- 12 YouTube “Der Fuehrer’s Face: Donald Duck as a Nazi|1943|WW2 Animated Propaganda Short Film by Walt Disney” (全体で7分54秒)
- 13 カルステン・ラクヴァ (真岩啓子訳) 『ミッキーマウス ディズニーとドイツ』現代思潮新社、2002年、213頁。
- 14 ロファ、前掲書、303-304頁。
- 15 ラクヴァ、前掲書、304頁。
- 16 同上書、214頁。
- 17 YouTube “Education for Death: The Making of the Nazi(1943)-WW2 Animated Propaganda Film by Walt Disney” (全体で10分08秒)
- 18 YouTube “Reason and Emotion” (全体で8分29秒)、“1943 Chicken Little” (全体で9分43秒)
- 19 ロファ、前掲書、295頁。
- 20 ゲイブラー、前掲書、167-168頁。
- 21 マーク・エリオット (古賀林幸訳) 『闇の王子ディズニー 下』草思社、1994年、79頁。
- 22 ロファ、前掲書、296頁。
- 23 ゲイブラー、前掲書、212頁。
- 24 同上書、171頁。
- 25 ロファ、前掲書、295頁。
- 26 同上書、296頁。
- 27 YouTube “Goofy: Victory Vehicles [Disney Cartoon Classic HQ]Disney Cartoon Full Episode Donald Duck Goofy HD” (全体で9分41秒)
- 28 YouTube 『ディズニー短編アニメーション グーフィーのすてきな乗り物』 (全体で7分13秒)
- 29 YouTube “Out Of The Frying Pan Into The Firing Line (1942)” (全体で3分18秒)